

# 現代日本語の判定詞と形容動詞—日本語形態論試論(その4)—

上野 義雄

## 序節

現代語のいわゆる形容動詞の扱いを巡っては、従来、二つの立場があった(cf.阪倉1983:215 ff.)。一つは、形容動詞という品詞を認め、「静かだ／静かな」などの語形を1語として扱う立場である(吉澤1932;橋本1935)。この場合、「静か」は語幹とされ、語の資格が認められない。また、「だ／な」などは活用語尾とされる。他方、形容動詞という品詞を認めない立場もあり、代表的なものが、二種類ある。まず、「静かだ／静かな」などにおける「静か」(形容動詞を認める立場では形容動詞の語幹)と、「だ／な」などの部分(形容動詞を認める立場からすれば、形容動詞の語尾)を、それぞれ語として認める(山田1922;松下1930;時枝1950;水谷1951;服部1950;渡辺1971)。したがって、この立場では、「静かだ／静かな」などは、2語からなっていることになる。「静か+だ」などの形を、山田は情態副詞+説明存在詞、松下は形容性無活用語+動助辞、時枝は体言+指定の助動詞、渡辺は状名詞+判定詞、であるとした。)形容動詞を認めないもう一つの立場は、「静かだ／静かな」などを一語として、形容詞の一種と見なす。この場合、従来の形容詞はイ形容詞(第一形容詞)、「親切だ／親切的な」などはナ形容詞(第二形容詞)とされ、語尾だけが異なる(三尾1942;鈴木1972;Nishiyama 1998)ことになる。

本論文の第2節では、上野(1999:58ff.)での提案に基づき、形容動詞(Na)の複合語分析を述べる。この提案の骨子は、(1)に整理できる。さらに、その準備として、第1節において判定詞の扱いを吟味し、(2)を主張する。

- (1) a. 形容詞(A)や名詞(N)とは異なる、形容動詞(Na)という品詞(範疇;CAT)を、表層統語構造(c-構造)と形態構造(m-構造)それぞれで、認める。
- b. 「親切だ、親切だった、親切的な」などの形は、c-構造において、一語をなす。
- c. いわゆる語幹「親切」をm-構造とc-構造で一語と認定する(m-CAT Na[1,BSE];c-CAT Na[BSE])。
- d. 「親切だ、親切だった」などのm-構造は、Na[1,BSE]と判定詞(Cop)との複合語と分析

する。

- e. 「親切な、がらあきの、親切に」などの語形は、Na[1, BSE]と後置詞「な、の、に」との複合語と分析する。
- f. Naのゼロ形は「親切に」のような「に」を伴う語形である。

- (2) a. 判定詞(Cop)は動詞ではなく、独自の品詞と認めざるを得ない。
- b. 判定詞「だ」は現代語においては「である」の縮約形とは分析できない。
- c. 判定詞「だ」はル形ではない。
- d. 判定詞「で」はテ形であり、ゼロ形ではない。
- e. 判定詞にはゼロ形が存在しない。

以下の議論から明らかになるように、判定詞の活用表は(3)のようになる。また、Naの各語形は(4)の通りである。各NaのFORM素性の値は、ゼロ形を除けば、複合語の第二要素のFORM素性の値を引き継いでいることに、注意。

- (3) 判定詞の活用 ル形、レ形、ゼロ形、ロ形は存在しない。

	m-CAT	FORM		m-CAT	FORM
ダ形	Cop[1, da]	da	タラ形	Cop[1, tara]	dar-tara
ヨウ形	Cop[1, yô]	dar-ô	テ形	Cop[1, te]	de
タ形	Cop[1, ta]	dar-ta	テモ形	Cop[1, temo]	demo
タリ形	Cop[1, tari]	dar-tari	タッテ形	Cop[1, taQte]	daQte

- (4) Na[1] m-構造規則(+は複合語の境界を示す)

ル形、レ形、ロ形は存在しない。Na[1, BSE]は、単純語、すなわち、複合語になっていない語形で、いわゆる語幹部分。

Na[0]→Na[1, BSE] (ゼロの屈折接辞)

ダ形 Na[1, da]→Na[1, BSE] + da (daのm-CATはCop[1, da])

ナ形 Na[1, na]→Na[1, BSE] + na (naのm-CATはP[1, na])

ノ形 Na[1, no]→Na[1, BSE] + no (noのm-CATはP[1, no])

ゼロ形 Na[1, NIL]→Na[1, BSE] + ni (niのm-CATはP[1, ni])

タ形 Na[1, ta]→Na[1, BSE] + datta (dattaのm-CATはCop[1, ta])

タリ形 Na[1, tari]→Na[1, BSE] + dattari (dattariのm-CATはCop[1, tari])

タラ形 Na[1, tara]→Na[1, BSE] + dattara (dattaraのm-CATはCop[1, tara])

テ形 Na[1, te]→Na[1, BSE] + de (deのm-CATはCop[1, te])

タッテ形 Na[1, tatte]→Na[1, BSE] + datte (datteのm-CATはCop[1, tatte])

テモ形 Na[1,temo]→Na[1,BSE]+demo (demoのm-CATはCop[1,temo])

ヨウ形 Na[1,yô]→Na[1,BSE]+darô (darôのm-CATはCop[1,yô])

各論に入る前に(1a)、すなわち、Naは、c-構造とm-構造それぞれにおいて、形容詞や名詞から区別されねばならない、ということを確認しておく。まず、Naがc-構造上名詞と異なることは、次のように示せる。Naの補部や付加詞は後置詞「の」でマークできないが(5a)、名詞の補部や付加詞は「の」でマークしなければならない(b)。(すなわち、PP[no]は名詞の投射に直接支配されなければならないが、名詞以外、たとえばNaの投射に直接支配されてはならない。)さらに、連体修飾の場合(c)、NaPは「の」でマークできないが、NPは「の」でマークされなければならない。(すなわち、NPは後置詞「の」補部になれるが、NaPはその補部になれない。)

- (5)a. [太郎に(\*の)]親切どころか、[涙が出るほど(\*の)]親切どころか、(Na)  
b. [太郎への]親切どころか、[涙が出るほどの]親切どころか、(N)  
c. 花子に親切な(\*の)太郎(NaP) / 花子への親切の大切さ(NP)

次に、Naがm-構造上、名詞と異なることは、サ名詞化の「さ」のように、Na[0]には付くが(優秀さ)、N[0]には付かない(\*秀才さ)派生接辞が存在すること、また「ぶり」のように、Na[0]には付かないが(\*優秀ぶり)、N[0]には付く(秀才ぶり)派生接辞が存在することなどから、示される。一方、Naがc-構造上、形容詞と異なることを示す現象も存在する。これらの現象は、形容詞とNaがc-構造上同一であるとする分析(Nishiyama 1998)に疑問を呈する。第一に、形容詞のゼロ形は等位構造の等位項になれるが(6a)、Naのゼロ形は等位項になれない(b)という、違いがある。

- (6)a. [美しく、悲しい]物語(形容詞ゼロ形が等位項)  
b. \* [きれいに、清潔な]部屋(Naゼロ形が等位項) cf. [きれいで、清潔な]部屋(Naテ形が等位項)

第二に、後置詞「ながら」(上野(1998:86-87))は、c-構造上、ル形形容詞句(AP[ru])を補部取る(7a)が、NaPの場合は、一見ル形に対応すると思われる「～だ」の形は補部にならずに、単純語形(Na[BSE])を主要部にした句(NaP[BSE])が補部となる(b)。このような、AP[ru]とNaP[BSE]を補部取る表現はかなり多い(上野(1999:60-61))。しかも、後述するように、Naにはル形が存在しないのであるから、c-構造上、形容詞とNaを同一視できない。

- (7)a. [6人家族には狭い]ながらも、わが家にまさるところなし。

b. [6人家族には手狭(\*だ)]ながら、わが家にまさるところなし。

第三に、同じような状況は、疑問の「か」についても起こる。すなわち、「か」は、形容詞ル形(A[ru])を主要部とする節AS[ru]と、(「～だ」の形は補部にならずに)Na[BSE]を主要部とする節NaS[BSE]とを補部にする(8a,b)。しかし、埋め込み節にかぎっては(c-構造に関わる条件)、「～だ」の形Na[da]を主要部とする節NaS[da]が「か」の補部として現われることが可能になる(c)。

(8)a. [だれが花子にやさしい]か。

b. [だれが花子に親切{\*だ/φ}]か。(主節)

c. [だれが花子に親切(だ)]か、分からない。(埋め込み節)

最後に、Naがm-構造上、形容詞と異なることは、両者の語形変化が異なることから、自明である。

後の議論のために、必要となる事項をまとめておく。以下において、Naの形態構造(m-構造)とその範疇(m-CAT)、および、表層統語構造(c-構造)とその範疇(c-CAT)を扱うのだが、範疇や素性、PS規則などについては、GKPS版GPSG(Gazdar et al. 1985)にならう。m-構造とc-構造との間の対応は、およそ次のようである。m-構造における動詞ル形(m-CATはV[1,ru])は、m-構造のFORM素性がc-構造のFORM素性として引きつがれるので、c-構造におけるV[ru]に写像され、ル形動詞を主要部とする句VP[ru]を投射する。詳しくは、上野(1998,1999)を参照。

(9)m-構造 ID規則

a. 派生 X[0]→X[0], Aff(Aff=派生接辞)

b. 屈折 X[1]→X[0], Aff(Aff=屈折接辞)

c. 複合 X[1]→X[1], X[1]

(10)おもな語形(V[1]とA[1])

	母音語幹動詞	子音語幹動詞	形容詞
ル形	tabe-ru	tor-u	uresi-i
レ形	tabe-re	tor-e	uresike-re
ヨウ形	tabe-yô	tor-ô	uresikar-ô
夕形	tabe-ta	tor-ta	uresikar-ta
タリ形	tabe-tari	tor-tari	uresikar-tari
テ形	tabe-te	tor-te	uresiku-te

ゼロ形	tabe	tori	uresiku
ロ形	tabe-ro	tor-e	

(11)m-構造エントリー余剰規則

形容詞			子音語幹動詞		
FORM	m-CAT	例	FORM	m-CAT	例
XV-	A[0,NIL]	uresi-	XC-	V[0,NIL]	tor-
XVke-	A[0,ke]	uresike-	XCi-	V[0,i]	tori-
XVku-	A[0,ku]	uresiku-	XCa-	V[0,a]	tora-
XVkar-	A[0,kar]	uresikar-			
母音語幹動詞					
FORM	m-CAT		例		
Xi-	V[0,NIL], V[0,i], V[0,a]	oki-			
Xe-	V[0,NIL], V[0,i], V[0,a]	tabe-			

(12)おもなA[1] m-構造規則

a. A[1,ru]→A[0,NIL]i	e. A[1,tari]→A[0,kar]tari
b. A[1,re]→A[0,ke](r)e	f. A[1,tara]→A[0,kar]tara
c. A[1,yô]→A[0,kar](y)ô	g. A[1,te]→A[0,ku]te
d. A[1,ta]→A[0,kar]ta	h. A[1,NIL]→A[0,ku]

おもなV[1] m-構造規則

a. V[1,ru]→V[0,NIL](r)u	f. V[1,tara]→V[0,NIL]tara
b. V[1,re]→V[0,NIL](r)e	g. V[1,te]→V[0,NIL]te
c. V[1,yô]→V[0,NIL](y)ô	h. V[1,NIL]→V[0,i]
d. V[1,ta]→V[0,NIL]ta	i. V[1,ro]→V[0,NIL]{ro,e}
e. V[1,tari]→V[0,NIL]tari	

## 1. 判定詞「だ」をめぐる諸問題

### 1.1 「だ」は「である」の共時的縮約形か？

通時的には「だ」は「である」から発達したのであるが(山田1922:87; 鈴木1972:414; 阪倉1983:261)、現代日本語において共時的に、「だ」が「である」の融合により生じた縮約形である(Nishiyama 1998)、とする分析は支持できない。第一の理由は、現代語においては両者の生起する統語的環境が異なるからである。

(1) 花子は大妻の学生{\*だ/である}

かも(しません)。に違いない。だろう。に過ぎない。らしい。みたいだ。

にもかかわらず、どころか、なら、

君がいつも正しいわけ{\*だ/である}まい。/まじめな学生{\*だ/である}べきだ。/決して、くそまじめな学生{\*だ/?である}なよ。(禁止)

第二に、現代語には、共時的縮約であると明らかに分析できる場合がある(2)。この場合、第二要素の末尾は何ら変化を受けずに、そのままである。したがって、もし「だ」が「である」の共時的縮約とすると、「だ」ではなく、「だる」が得られるはずである。

(2) 動詞テ形+補助動詞の場合

-te age-ru→-tage-ru 食べてあげる→食べたげる

-te i-ru→-te-ru 食べている→食べてる

-te i-na-i→-te-na-i 食べていない→食べてない

-te ik-u→-tek-u 食べて行く→食べてく

-te ok-u→-tok-u 調べておく→調べとく

-te simaw-u→-tyaw-u 食べてしまう→食べちゃう

-te yar-u→%-tar-u なぐってやる→なぐったる

第三に、前掲の、共時的縮約と分析できる縮約形の場合には、その元になった補助動詞とまったく平行した活用形を示す。したがって、もし「だ」が「である」の共時的縮約形ならば、二者の活用形は平行するはずだが、実際には、二者の活用形には平行しない部分(\*で示した部分)がある。以上により、現代語においては、「だ」を「である」の縮約形とする共時的分析は不可能である。

(3)	「だ」	「である」
ル形	なし(*dar-u)	de ar-u
レ形	なし(*dar-e(ba))	de ar-e(ba)
テ形	de(*dar-te)	de ar-te
テモ形	demo(*dar-temo)	de ar-temo
タツテ形	daQte(*dar-taQte)	de ar-taQte
ゼロ形	なし(*dari)	de ari
ロ形	なし(*dar-e)	de ar-e

## 1.2 後置詞「な、の、なら」

よく知られているように、Na連体形に現われる「な」は、「の、もの、ため、はず、よう」などの形式名詞や、「だけ、ばかり、ので、のに、ほど」などの後置詞の補部をマークするのにも使われる(1a)(三尾1942:171;鈴木1972:426)。また、形式名詞「よう」を含む、いわゆる助動詞の「ようだ」の連体修飾にも「な」が現われる(b)。さらに最近では、「な」はNPを補部に取り、かなり自由に使われている(c)。しかも、「な」(と後述の「の」)には丁寧体が欠けている(d)。したがって、本論では、現代語における「な」を後置詞として扱うことにする(cf.寺村1982:69)。(すなわち、「な」は通時的には「なり」の連体形「なる」から生じたものの、現代語では共時的に後置詞として分析した方が妥当である、と考えられる。)[付記:「な」が「だ」の連体形である可能性を吟味すべきであった。次回への課題としたい。]

### (1)a. PP[na]を補部にする形式名詞「もの」、後置詞「だけ」

花子は[大妻の学生]なものですから、/[授業が9時から]なものですから、  
[花子がふまじめな学生]なだけで、/[授業が9時から]なだけで、

### b. 「よう{だ/な}」(「よう」を主要部とするNPが「だ/な」の補部になっている)

[[花子の]よう]な話し方/[魚が焦げている]よう]な臭い

### c. 女性雑誌新聞広告に見られる「な」

女の子なワンピース&セクシーなパンツ/メチャ<sup>2</sup>「流行」な私になる!/ノリかな女に続く  
のは誰?/ドレスな女/「恋は電撃」な女たち

### d. うちの娘が大妻の学生{な/\*です/である/であります}ものですから、

Naの中には、その連体形が「～の」になるもの(がらあきだ、本当だ、早めだ、うってつけだ、など)が多数存在するが、これらも、前掲の形式名詞や後置詞の前では「の」ではなく、「な」が要求される(2a)。(Naの下位分類については、鈴木1972:432-434;城田1998:226-234;木村1998を参照。)さらに、Naの中には、「同じだ、～すべきだ」などのように、その連体形が「～な、～の」にならずに、単純語形(Na[BSE])(序説(4)参照)と同じになるものがある。この場合も、前掲の形式名詞や後置詞の前で「な」が現われることが可能になる(b)。これらの例は、Na[BSE]を主要部とした節NaS[BSE]が後置詞「な」の補部になっていると分析せざるを得ない。

### (2)a. がらあき{の/\*な}電車

[電車ががらあき]{\*の/な}ものですから、/[電車ががらあき]{\*の/な}だけで、

### b. 同じ{\*の/\*な/∅}名前

[名前が同じ]{\*の/な/∅}ものですから、/[名前が同じ]{\*の/な/∅}だけで、

また、従来、(3a)のような「の」を「だ」の連体形として扱ってきた(三尾1942:173; 阪倉1983:260; 益岡・田窪1992:26)。しかし第一に、そもそも後置詞「の」は非定形節をその補部にとれる(b)。第二に、ゼロN-bar代用形はPP[no]の直後にのみ現われる(c)のだが(cf. 山田1922:144)、従来「だ」の連体形とされてきた「の」もゼロN-barの生起を許す(d)。第三に、補文標識(C)「と」を主要部とする句CPは、「の」の補部にはなれるが、「だ」の補部にはなれない(e)。そこで、(a)の場合の「の」も、「だ」の連体形と分析するのではなく、後置詞「の」として扱うことにする(cf. 寺村1982:69)。したがって、(a)では後置詞「の」が名詞を主要部とする非定形節(NS)を補部を取っている、ということになる。

- (3) a. [花子が[大妻の学生]]の時、cf. [花子が[大妻の学生]]当時、[花子が[[大妻の学生]だった]]時、  
 [毎晩酒を飲むのが習慣]の人cf. [毎晩酒を飲むのが[習慣だった]]人  
 [大学教授で、評論家]の野上氏
- b. [花子が歌ったり、太郎が踊ったり]の大騒ぎ/[こどもが急に熱を出して]の欠勤/[花子がアメリカを訪問]の折りに、/[田中先生が学生をお待ち]の際に、
- c. あの三省堂の[英語の辞書]ではなく、この小学館の∅を買った。  
 \*あの[英語の辞書]ではなく、この∅を買った。  
 あの新品の[英語の辞書]も、このぼろぼろ{の/\*な}∅も、どちらも太郎のものだ。  
 cf. ぼろぼろ{の/な}辞書  
 \*田中先生が編集主幹だった[英語の辞書]も、中田先生が編集主幹だった∅も、どちらも誤植が多い。/\*田中先生がお持ちだった[英語の辞書]も、中田先生がお持ちだった∅も、どちらも誤植が多い。
- d. 田中先生が編集主幹の[英語の辞書]も、中田先生が編集主幹の∅も、どちらも、誤植が多い。  
 田中先生がお持ちの[英語の辞書]も、中田先生がお持ちの∅も、どちらも、誤植が多い。
- e. [[花子が大妻に合格した]と]の発言/\* [[花子が大妻に合格した]と]だった発言/太郎が[[花子が大妻に合格した]と]発言した。/\* 太郎が発言したのは、[[花子が大妻に合格した]と]だった。

従来、「なら」は「だ」の假定形とされてきたが、現代語においては後置詞とする分析のほうが妥当である(cf. 益岡・田窪1992:25)。「なら」は、名詞句や後置詞句のみならず、定形節をもその補部にとる。



### 1.3 判定詞という範疇

「だ」、およびその活用形「だった、だろう」などは、以下の理由により動詞や形容詞に帰属させることは無理であるので、これらとは別に、判定詞(Cop)という範疇をc-構造、m-構造において認めることにする。この結論が正しい限りにおいて、影山(1993: 369-370)のような、「だ」を動詞と分類し、そのル形として「\*だる」を想定し、義務的な調整規則により「だ」を導く、という分析は誤っていることになる。第一に、判定詞には、動詞や形容詞と異なり、後述するように(序説(3)参照)ル形、レ形、ゼロ形、ロ形が存在しない。第二に、丁寧体の作り方を見てみると、動詞丁寧体の場合はtabe-masi-ta/nomi-masi-taのように、派生接辞-mas-を用いた派生である。また、形容詞丁寧体の場合は、[omosirokar-ta]+[desu]のように、「です」を用いた複合である。一方、判定詞の場合は、これらの場合と異なり、「ダ～デス」、「ダッタ～デシタ」のように、des-を用いた補充(suppletion)である。第三に、判定詞は、動詞や形容詞と異なり、後置詞を介さずに直接NPを補部に取りることができる。第四に、判定詞は、それ自体は否定形を持たず、「～で ある」の否定形「～で ない」で代用している。この代用形は、動詞の否定形とは異なり、c-構造上2語からなる。その点、形容詞の否定形と同様である。しかし、形容詞の否定形(「[花子にやさしく] ない」)では、「ない」の補部が形容詞ゼロ形を主要部とする句AP[NIL]だが、「～で ない」(「[大妻の学生で] ない」)においては、「ない」の補部は判定詞テ形(「で」)を主要部とする句CopP[te]となっている。

### 1.4 判定詞「だ」の範疇

判定詞「だ」は、その他の「だ」の活用形(タ形「だった」、ヨウ形「だろう」など)からも、また動詞や形容詞(のル形)からも、区別されなければならない。「だ」は、ある種の終助詞(すなわち、節を補部にとる後置詞の一種)と共起制限を示すからである(1)。さらに、「らしい、みたいだ、にちがいない」など、一連の文末表現(1.1(1)参照)や「なら、ながら」などの後置詞とも共起制限を示す。

#### (1) 終助詞との共起制限

そうか、花子が大妻の学生{\*だ/∅/だった}か。

だれが大妻の学生{\*だ/∅/だった}か？

cf.[だれが大妻の学生{だ/∅/だった}か](が)、ちっとも分からない。(埋め込み節)

花子が大妻の学生{\*だ/∅/だった}かしら。

もちろん、花子が大妻の学生{\*だ/∅/だった}さ。

花子が大妻の学生{だ/∅/だった}よ。(だ/∅で、文体上の違いが生じる)

花子が大妻の学生{だ/∅/だった}ね。(だ/∅で、文体上の違いが生じる)

#### (2) 補部NS[花子が大妻の学生]{か/かしら/さ/よ/ね}。

後述するように、「だ」はル形ではないので、判定詞のFORM素性に新たな値daを設けて、「だ」は判定詞のダ形(m-CAT Cop[1,da]; c-CAT Cop[da])と定める(序説(3)参照)。後置詞「か、かしら、よ、ね」などは(2)、名詞を主要部とする非定形節(NS)を補部を取れるが、Cop[da]を主要部とする節(CopS[da])を補部には取らない。ただし、「か」は埋め込み節ではCopS[da]を補部を取れる。

### 1.5 「だ」は動詞ル形ではない

「だ」は、m-構造においても、c-構造においても、動詞ル形としての振る舞いを示さない。まず第一に、「だ」は、m-構造上動詞ル形(V[1,ru])の語形(序説(12)参照)をしていない。「だ」のタ形daQ-taやヨウ形dar-ôの語形から判断すると、\*dar-uが本来あるべきル形の語形であるが、このような語形は存在しない。第二に、「だ」にはm-構造上V[1,ru]としての振る舞いが見られない。たとえば、意志/推量を表わす助動詞(不変化詞)「まい」に注目してみる。まず、「まい」はm-構造で動詞とともに複合語をなし、c-構造上はこの複合語が1語をなしている(すなわち、「まい」がc-構造上単独で1語をなして、その補部に節やVPをとっている、という可能性はない)ことを示す。「まい」は、子音語幹動詞のル形か母音語幹動詞のゼロ形を要求する(1)。動詞が子音語幹か母音語幹かということは、m-構造にだけ関わる情報であり、c-構造上にこの情報が伝達されることはない。したがって、もし「まい」がc-構造上単独で節点を成し、それがSないしVPを補部を取ったとすると、その補部の主要部が子音語幹か母音語幹かという選択は不可能になってしまう。さて、「ある」は子音語幹動詞であるから「あるまい」が可能なのは当然だが、一方「だまい」は不可能である(2)。このことから、「だ」はm-構造上、子音語幹動詞のル形でも母音語幹動詞のゼロ形でもない、ことになる。「だ」がタ形やヨウ形などを見る限り子音語幹動詞的であることを考慮すると、「だ」はm-構造上動詞ル形としては振る舞っていない、と結論できる。

#### (1) V+maiでc-構造上1語

子音語幹動詞V[1,ru]+mai [nom-u]+mai  
母音語幹動詞V[1,NIL]+mai tabe+mai

#### (2) \*da+mai cf.aru+mai

他人のこと{\*だ/である}まいし、少しはまじめに考えなさい。

「まい」に関して、「c-構造上単独で1語をなし、その補部としてル形動詞を主要部とするS(ないしVP)を取る。ただし、後に(音韻部門?)「まい」の直前の動詞ル形の-ruは削除される」と主張することは無理である。「作りうるまい」から「\*作りうまい」が生じるという問題が起こるからである。

(3) 可能派生接辞-e/u- 作り{う／え}る 作り{\*う／え}まい

第三に、「だ」はc-構造においても、動詞ル形(V[ru])としての振る舞いが見られない、ということを確認する。たとえば、c-構造においてV[ru]が要求されるのは、義務などを表わす「べき(だ)」の場合である。「べき(だ)」はその補部にVP[ru]を要求する(4)ので、「であるべきだ」は可能である(b',c',d')が、「だべきだ」は不可能である(c,d)。したがって、「だ」はc-構造上V[ru]としては振る舞っていない。

(4) a. [薬を飲む]べきだ(VP[ru])

- |                            |                           |
|----------------------------|---------------------------|
| b. * [自分に厳しい]べきだ(AP[ru])   | b'. [自分に厳しくある]べきだ(VP[ru]) |
| c. * [正直な人間だ]べきだ(CopP[da]) | c'. [正直な人間である]べきだ(VP[ru]) |
| d. * [自分に正直だ]べきだ(NaP[da])  | d'. [自分に正直である]べきだ(VP[ru]) |

第四に、「だ」と共起制限を示す一連の文末表現(1.1(1))や終助詞(1.4(1))を用いても同じ結論が得られる。すなわち、これらは、動詞や形容詞のル形を主要部とする句や節をその補部にとるが、「だ」を主要部とする句や節はその補部になれない。したがって、「だ」はc-構造上動詞や形容詞のル形として機能していないことになる。

### 1.6 判定詞におけるル形の欠如

「だ」を判定詞のル形としてしまうと、「だ」と共起制限を示す一連の文末表現や終助詞の扱いが複雑になるという問題が起こる。これらの表現は、タ形についてはどんな品詞のタ形(V[ta], A[ta], Cop[ta], Na[ta])でもその補部の主要部になれるが、ル形については、形容詞と動詞のみが補部の主要部となる(1)。「だ」をル形とせず、ダ形として認めた場合には、前述の状況は、「定形(すなわち、ル形とタ形)を主要部とする句が補部となる」で、捕えられる。したがって、簡潔な記述を得るためには、判定詞にはル形が存在せず、「だ」はダ形であるとしたほうがよい。さらに、ダ形は判定詞と形容動詞だけに特有の語形となり、間接疑問文で「～だか」が可能になるなど、ダ形に特有な現象が捕えやすくなる。

(1) a. \* 花子は、[大妻の学生だ]に過ぎない。(CopP[da])

- a'. 花子は、[大妻の学生]に過ぎない。(NP)
- b. 花子は、[大妻の学生だった]に過ぎない。(CopP[ta])
- c. \* 花子は、[花子に親切だ]に過ぎない。(NaP[da])
- c'. 太郎は、[花子に親切]に過ぎない。(NaP[BSE])
- d. 太郎は、[花子に親切だった]に過ぎない。(NaP[ta])
- e. 花子は、[大妻の学生である]に過ぎない。(VP[ru])

- f. 花子は、[大妻の学生であった]に過ぎない。(VP[ta])
- g. 太郎は、[花子にやさしい]に過ぎない。(AP[ru])
- h. 太郎は、[花子にやさしかった]に過ぎない。(AP[ta])

### 1.7 判定詞におけるレ形とロ形の欠如

判定詞にはレ形が存在しない(1a)。レ形は、現代語では分布が限られていて、後置詞「ば」の補部の主要部として現われるだけである。(後置詞「ど(も)」もレ形を要求するが、用法が慣用句的なものに限られている。)動詞や形容詞のレ形を主要部とする節は、「ば」の補部になるが、判定詞を主要部とする節は「ば」の補部になれない(1a)。さらに、判定詞にはロ形も存在しない(b)。

- (1)a. レ形を主要部とする節(S[re])を補部にとる後置詞「ば」  
 [太郎が料理を食べれ]ば(VS[re]) [太郎が花子にやさしけれ]ば(AS[re])  
 \* [太郎がまじめな学生だ(れ)]ば cf.[太郎がまじめな学生であれ]ば(VS[re])
- b. 料理をtabe-ro/酒をnom-e  
 \*まじめな学生だれ cf.まじめな学生であれ

### 1.8 判定詞「で」は何形か

判定詞の語形「で」は、c-構造上、テ形(Cop[te])に該当する(cf.橋本1935[1979:382-3];寺村1991:218)。第一に、「～してかまわない/よい」などの構文を見ると、動詞と形容詞に関しては、テ形は可能だが、ゼロ形は不可能である(1a,b)。一方、判定詞の場合は、「で」が可能である(c)。これは、「で」がc-構造上判定詞のテ形(Cop[te])として振る舞っている、と解釈できる。

- (1)a. VP[te]かまわない 酒を{飲んで/\*飲み}かまわない。
- b. AP[te]かまわない 自分に{甘くて/\*甘く}かまわない。
- c. CopP[te]かまわない 新入生でかまわない。

第二に、「どんなに～しても」という表現を見てみる(2a,b)。判定詞の場合は、「でも」という語形が現われる(2c)。動詞や形容詞のテモ形が、「テ形+も」という形をしていることから、「でも」の場合も同様に「テ形+も」の形であると推定される。もしそうならば、「で」は判定詞のテ形ということになる。

- (2)a. どんなに+VP[temo] どんなに[酒を飲んでも]
- b. どんなに+AP[temo] どんなに[みんなにやさしくても]

c. どんなに+CopP[temo] どんなに[優秀な学生でも]

第三に、中止法を見る。動詞や形容詞の中止法は、ゼロ形でもテ形でも可能であるが、文体上の違いが生じる。ゼロ形による中止法は主として文章語で用いられ(鈴木1972:330)、硬い文体になるが、テ形の中止法にはそのような文体的特徴ない(3a,b)。一方、「で」を用いた中止法を見てみると(c)、硬い響きはなく、通常のゼロ形中止法に見られる文体的特徴が感じられない。これは、「で」が動詞や形容詞の場合のテ形中止法に対応しているからである、と解釈できる。そうならば、「で」はc-構造上、判定詞のテ形ということになる。

(3)a. V[NIL]／V[te] 花子が{歌い／歌って}、太郎が踊った。

b. A[NIL]／A[te] 花子は{厳しく／厳しくて}、太郎はやさしかった。

c. 花子は高校生で、太郎は大学生だった。

第四に、テ形の繰り返しを用いた表現を見てみる。この表現では、動詞や形容詞のテ形は可能だが、ゼロ形は不可能である(4a,b)。一方、Naの場合には、「退屈で」のように、「～で」の形が現われる(c)。後述するように、Naは、いわゆる語幹に相当する部分と判定詞の各活用形とが合わさった複合語と分析される(序説(4)参照)。活用語の複合語の場合、そのFORM素性は、第二要素のそれを引き継ぐのが原則である。この繰り返し表現に、Na「退屈+で」が現われるということは、この「～で」という形がの複合語Naのテ形であり、したがって、その第二要素「で」のm-CATは判定詞テ形(Cop[1,te])である、ということになる。

(4)a. V[te] V[te] {食べて食べて／\*食べ食べ}、しかたがない。

b. A[te] A[te] {悲しくて悲しくて／\*悲しく悲しく}、しかたがない。

c. Na[te] Na[te] 退屈で退屈で、しかたがない。

第五に、上野(1998:78-82)で示したように、[V[0,a]-na-i]+de(食べないで、飲まないで)という語形のc-CATは、V[te]であり、そのm-構造は、動詞否定形のル形と判定詞「で」とからなる複合語である、と分析した。上述のように、複合語の場合、そのFORM素性は、第二要素のそれを引き継ぐのが原則である、ということを経験すると、「飲まない+で」などの第2要素「で」はテ形、すなわち、そのm-CATはCop[1,te]ということになる。第六に、「だ」と「です」との、普通体と丁寧体との対応において、「で」の丁寧体は「でして」というテ形である。このことから、「で」のm-CATはCop[1,te]ということになる。第七に、「～しての」という理由を表わす連体修飾表現を考えてみる(5)。この表現では、動詞や形容詞のテ形は可能だが、ゼロ形は不可能である(a,b)。一方、判定詞の場合は、「で」が現われる。これは、「で」がc-構造上判定詞のテ形であることを示している、と解釈できる。以上により、判定詞の「で」

は、c-構造とm-構造において、テ形(m-CAT Cop[1,te]; c-CAT Cop[te])である、と結論できる。これは、歴史的には、「にてあり→であり→だ」と発達してきた(鈴木1972:423; 阪倉1983:261)ことを考慮すると、当然の結果である。

- (5)a. [かぜを{ひいて/\*ひき}]の欠席(VP[te])  
 b. [頭が{痛くて/\*痛く}]の欠席(AP[te])  
 c. [二度と帰らないつもりで]の家出(CoP[te])

### 1.9 判定詞「で」は動詞と異なる

ここでは、判定詞と動詞とは別の品詞である、とした先の結論をさらに支持する現象を、「で」に関して取り上げる。まず、「で」はc-構造上、V[te]として振る舞わないことを示す。VP[te]を補部にとる動詞や形容詞「いる、みる、やる、もらう、ほしい」などにおいては、「～であって」はVP[te]なので補部になれるが、「～で」はその補部になれない(1)。

- (1)a. PP[ni] VP[te]ほしい 太郎に[酒を飲んで]ほしい  
 b. \*PP[ni] AP[te]ほしい 太郎に[自分に{\*厳しくて/厳しくあって}]ほしい  
 c. \*PP[ni] CopP[te]ほしい 太郎に[やさしい人{\*で/であって}]ほしい

次に、「で」はc-構造上、V[NIL]として振る舞わないことを示す。これは、補部にVP[NIL]を取る後置詞「ながら」(上野(1998:86-87))では、「でありながら」は可能だが、「でながら」は不可能であることから、分かる(2a)。さらに、「で」はm-構造上、V[0,i]として振る舞わないことを示す。希望/願望の「たい」や継続の「続ける」などの派生接辞は、m-構造上V[0,i]をその補部を取る(上野(1998:55-56))。「でありたい、であり続ける」は可能だが、「でたい、で続ける」は不可能である(2b)。

- (2)a. [まじめな学生{\*で/であり}]ながら  
 b. まじめな学生{\*で/であり}たい まじめな学生{\*で/であり}続ける

### 1.10 判定詞におけるゼロ形の欠如

判定詞には、ゼロ形が存在するかどうか、考えてみる。「にて→で」という歴史的発達を考慮すると、テ形「で」に対して「に」がゼロ形のはずである。しかし現代語においては、「に」を判定詞のゼロ形とする根拠は筆者の知る限り存在しない(cf.寺村1982:54; 寺村1991:218)。たとえば、中止法を考えてみる。動詞と形容詞の場合、テ形とゼロ形の2種類の中止法がある。「だ」の場合には、「で」を用いた中止法しかなく、それは、文体の上からテ形中止法に対応する(1.8(3))と考えられる。硬い響きを持つ文章語の文体であるゼロ形中止法は

存在しない、と言わざるを得ない(1)。ただし、古語において、また、文語表現としては、「に」が中止法で用いられる(すなわち、「なり」の連用形の「に」)ことがある。

(1)花子は高校生で/\*に、太郎は大学生だった。花は紅に、柳は緑。(岩波国語辞典；に)

取り立て詞「さえ、は、も」などの直前には、動詞や形容詞のゼロ形が現われる(2a,b)。判定詞の場合には、「で{さえ／は／も}ある」という表現が可能である(c)。しかし、これを根拠に、「で」が判定詞のゼロ形である(cf.橋本1935[1979:385]；水谷1951[1979:405]；城田1998:239)、と結論付けることはできない。すでに論じたように、「である」における「で」はテ形であるから、(2c)は、むしろ(e)のようなVP[te]を補部を取る一連の表現と同列に扱われるべきものである。実際、「ある」はVP[te]を補部を取る(d)ことが可能である。一方、「に{さえ／は／も}ある」という表現は不可能である(f)から、「に」はやはり判定詞のゼロ形としては機能していない。同様に、「である」の否定「でない」の場合も(3a)、その「で」はテ形ということになる。すなわち、(3a)は(b)ではなく、(c)と同列で、(3a)の「ない」はCopP[te]を補部を取っている、と分析できる。

(2)a. VP[NIL] sae su-ru 太郎は、[酒を飲み]さえする。

b. AP[NIL] sae ar-u 太郎は、[こどもにやさしく]さえある。

c. CopP[te] (sae) ar-u 太郎は、[くそまじめな学生で](さえ)ある。

d. VP[te] ar-u 名前が[鉛筆で書いて]ある。

e. VP[te] (sae) mi-ru 太郎は、[酒を飲んで](さえ)みた。

f. \*CopP[NIL] sae ar-u \*太郎は、[くそまじめな学生に](さえ)ある。

(3)a. CopP[te] na-i 花子は、[大妻の学生で](は)ない。

b. AP[NIL] na-i 花子は、[太郎にやさしく](は)ない。

c. VP[te] na-i 名前が[鉛筆で書いて]ない。

## 2. いわゆる形容動詞の複合語分析

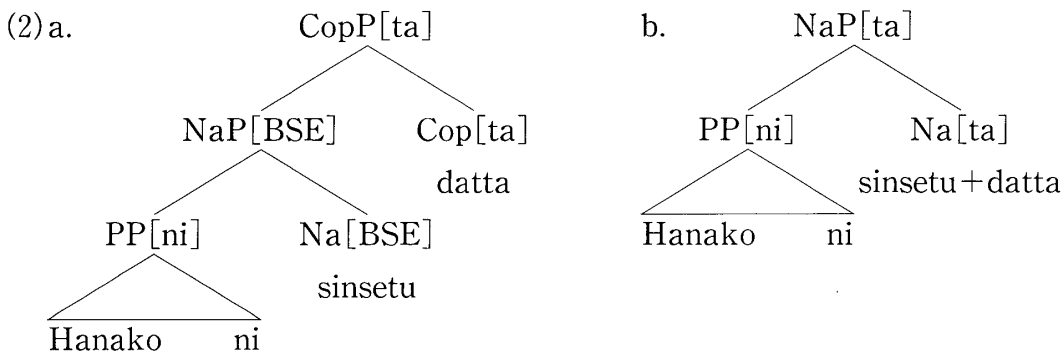
### 2.1 形容動詞のいわゆる語幹部分

上野(1999:60-61)で示したように、形容動詞(Na)のいわゆる語幹(たとえば、「しずかだ、しずかな」における「しずか」)そのものを、c-構造において語として扱う必要があることを示す現象が、多数存在する。特に、ダ形を主要部とする句(CopP[da]とNaP[da])は補部にならないが、ル形、夕形を主要部とする句(VP[ru]、VP[ta]、AP[ru]、AP[ta]、CopP[ta]、NaP[ta])やNPは補部になる表現が、かなり多い(1.1(1)；1.6(1)参照)。これらの表現は、形容

動詞のいわゆる語幹部分を主要部とする句(NaP[BSE])をその補部を取る(1.6(1c'))。また、いわゆる語幹部分は単独で述部を成すことも多い(1)。

- (1) ああ、愉快、愉快。(橋本1935[1979:386]) / まあ、綺麗！(水谷1951[1979:408])  
 あの着物も派手、この着物の派手、どれにしようかしら。(水谷1951[1979:408])

したがって、Naの語幹に相当する部分を語(単純語形m-CAT Na[1,BSE]; c-CAT Na[BSE])として認定することにする。1.6(1c')のNaP[BSE]は、c-構造においてNa[BSE]を主要部とした句である。すると、NaP「花子に親切だ、花子に親切だった、花子に親切な」などについては、そのc-構造として、次の2通りが考えられる。(2a)では、「花子に親切」というNaP[BSE]が判定詞タ形Cop[ta]の補部になっている。(2b)では、「親切だった」が複合語を成し、c-構造上は1語、すなわち、Naのタ形(Na[ta])となって、これが補部PP[ni]を取り、句NaP[ta]を成している。



(2a)の分析には、いくつかの問題がある。まず第一に、「親切だ、親切だった」などがc-構造で2語を成している、ということを示す現象は筆者の知る限り存在しない。たとえば、NaP[BSE]と判定詞との間に、「さえ、も、は」などの取り立て詞は挿入できない(3)(上野1999:61-62)。一方、判定詞がNa[BSE]以外の品詞につく場合は、取り立て詞の挿入はかなり自由なようである(上野1999:62-63)。すなわち、Na[BSE]以外のXについて、取り立て詞がXPを補部にとって句を成し、その句が判定詞の補部になっている、という構造が可能である(4)。また、Na[BSE]と判定詞との間には、書き言葉の場合でも、挿入句を置くのは不自然である(5b)。一方、名詞句と判定詞の間には、挿入句を置いても自然である(5d)。(書き言葉における挿入句を語の判定テストに用いることについては、服部1950[1979:95]参照)

- (3)a. \*太郎は、花子に親切{は／も}だ。  
 b. \*太郎は、花子に親切{は／も}である。cf.太郎は、花子に親切で{は／も}ある。  
 c. \*太郎は、花子に親切{は／も}になった。cf. 太郎は、花子に親切に{は／も}なった。



d. 静かは静かだが、(服部1950[1979:86])

あの家かね。静かは静かでも、足が不便なんでね。(水谷1951[1979:408])

確かに、太郎は花子に親切は親切だが、(上野1999:62)

花子に親切も親切、こんなに花子に親切な人は、(上野1999:62)

(4)a.それは、[[大妻の学生]も]だ。 b.それは、[[大妻のキャンパスで]も]だ。

(5)a.展示品がすべてみごとだった(ただし、制作費と制作年代は不明)今回の展覧会

b. ?展示品がすべてみごと(ただし、制作費と制作年代は不明)だった今回の展覧会

cf.今回の展覧会は、展示品がすべてみごと(ただし、制作費と制作年代は不明)にもかかわらず、

c.実業家だった(ただし、会社名と年収は不明)花子の交際相手

d.実業家(ただし、会社名と年収は不明)だった花子の交際相手

(2a)の分析の二番目の問題点として、いわゆる形容動詞語幹部分と形容詞語幹部分とが同じ形をしているNaと形容詞の組が、少数ながら存在する(暖かだ/暖かい、柔らかだ/柔らかい、こまかだ/こまかい、など)。この場合、(2a)の分析を採ると、c-構造上「あたたかい」は1語だが、「あたたかだ」は2語ということになってしまう。三番目の問題点として、Naには、連体形が「～な」になるものの他に、「～の」になるもの(少しの、がらあきの、本当の、など)、どちらでもよいもの(わずか{な/の}、さまざま{な/の}、特別{な/の}、など)がある。各Naについて、「な」、「の」、「な、の」のどれが可能なのかは、語彙的な性質であるので、それぞれの語彙エントリーに記載されなければならない情報である。(連体形に「な」を取るタイプが無標(unmarked)、あるいはdefaultであることを認めた上でも、やはり記載は必要である。)もし、(2a)の分析を採用するとなると、Naの最大投射(NaP)が、どの後置詞(「な」か、「の」か、その両方か)の補部になりえるのかまで、記載しなければならなくなってしまう。四番目の問題点として、Naのゼロ形(Na[NIL]「親切に」)に関する問題がある(ゼロ形が「～に」であることについては、2.2を参照)。影山(1993:369)が指摘するように、分裂文の焦点の位置では、名詞句に付く「に」は省略可能だが(6a)、Naに付く「に」は省略できない(b)。もし、(2a)の分析を採用すると、(6b)の非文が説明できなくなる。一方、(2b)の複合語分析をとると、問題が起こらない。五番目に、同様の問題は、動詞「なる」の補部でも起こる。この動詞は、PP[ni]とPP[to]を補部にとる(「大臣になる、大臣となる」)が、Naの場合は「～に」の形だけが可能である(「静か{に/ \*と}なる」)。 (2a)の分析を採用すると、この違いが捕えられなくなってしまう。以上の理由から、(2b)の複合語分析(上野(1999:63))を採用することにする。すなわち、Naは、その直後に判定詞を伴っていない場合は単独でc-構造上1語として振る舞うが、判定詞を伴っている場合は、Naと判定詞が複合語を成し、c-構

造上1語として振る舞う。(判定詞が、語や句に後接する接辞のようなものではなく、れっきとした語の資格を有するものであることについては、上野(1999:63)を参照。)

(6) 括弧内は分裂文の焦点のc-CAT

- a. 太郎になりたいのは、[外科の医者{に/∅}]だ。(PP[ni]/NP)
- b. 太郎になりたいのは、[高齢者に親切{に/\*∅}]だ。(NaP[NIL]/\*NaP[BSE])
- cf. 太郎になりたいのは、[高齢者にやさしく]だ。(AP[NIL])

「Na[BSE]だ」などがc-構造上1語であることに対する、一見反例に見える現象が存在する。(7a)において、「不親切かだ、不親切かで」という部分は、一見、Na[BSE]「不親切」と判定詞「だ、で」とが「か」によって2語に分かれているように見える。しかし、その見方は誤りである。なぜならば、(7a)の「XPかYPかだ/である」という表現は、「XPかYPか」という構成素が判定詞「だ、で」の補部になっているという構造をしているからである。第一に、「XPか」を落とすと非文になる(7b)。第二に、XPとYPには名詞句、ル形やタ形の句なども現われることができる(7c)。したがって、(7a)は形容動詞複合語分析への反例にはならない。

(7)a. 太郎は、[花子に親切]か、[次郎に不親切]か{だ/であった}。

b. \*太郎は、[次郎に不親切]か{だ/であった}。

c. 括弧内はXPとYPのc-CAT

太郎は、[早稲田の学生]か、[慶應の学生]かだ。(NP)

太郎は、[早稲田の学生だった]か、[慶應の学生だった]かだ。(CopP[ta])

太郎は、[花子に親切だった]か、[次郎に不親切だった]かだ。(NaP[ta])

太郎は、[テレビを見る]か、[ラジオを聞く]かだ。(VP[ru])

太郎は、[テレビを見た]か、[ラジオを聞いた]かだ。(VP[ta])

太郎は、[花子にやさしい]か、[次郎に厳しい]かだ。(AP[ru])

太郎は、[花子にやさしかった]か、[次郎に厳しかった]かだ。(AP[ta])

## 2.2 Na[1] m-構造規則

(1)が、Naのm-構造エントリー余剰規則である。また、複合語分析を採用したNa[1] m-構造規則は、序説(4)に掲げた通りである。(1)に基づけば、Na「親切(だ)」のm-構造エントリーは(2)のようになる。すでに述べたように、Naは判定詞を伴わない場合も、単独で語を成すから(単純語形)、その場合のm-CATをNa[1,BSE]と定める(序説(4)参照)。(1)や(2)において、Na[0]の指定は、サ名詞化や様相を表わす形容動詞派生接辞-sôなどで必要になるからである(3)(4)。

- |   |   |
|---|---|
| <p>(1) Naのm-構造エントリー余剰規則<br/>FORM m-CAT<br/>X Na[0]</p>              | <p>(2) Na「親切」のm-構造エントリー<br/>FORM m-CAT<br/>sinsetu Na[0]</p>  |
| <p>(3) サ名詞化<br/>a. A[0, NIL]-sa やさしさ<br/>b. Na[0]-sa 親切さ(親切さ加減)</p> | <p>(4) Na派生接辞-sô<br/>a. A[0, NIL]-sô やさしそう(だ)<br/>b. Na[0]-sô 親切そう(だ)<br/>c. V[0, i]-sô 書きそう(だ)</p> |

Na[1] m-構造規則(序説(4))において、NaのFORM素性の値は、ゼロ形以外は、複合語の第二要素のFORM素性の値を引き継いでいる。また、ゼロ形を「～に」と定めた理由は、以下のような、形容詞ゼロ形の振る舞いととの平行関係を捕えるためである(cf.橋本1935[1979: 382])。「～で」をテ形とし、「～に」をゼロ形とすることは、「にて-->で」という歴史的発達を考えても、自然な結論である。

(5)「なる」の補部、結果構文

- 花子は急に[みんなにやさしく]なった。(AP[NIL])  
 花子は急に[みんなに親切に]なった。(NaP[NIL])  
 花瓶が[細かく]砕けた。(A[NIL]) 花瓶が[粉々に]砕けた。(Na[NIL])

(6)「する」の補部、結果構文

- 先生は課題をわざと[みんなに(とって)難しく]した。(AP[NIL])  
 先生は課題をわざと[みんなに(とって)面倒に]した。(NaP[NIL])  
 太郎は花瓶を[細かく]砕いた。(A[NIL]) 太郎は花瓶を[粉々に]砕いた。(Na[NIL])

(7)連用修飾／補語

- [おもしろく]話す／[おもしろく]感じた(A[NIL])  
 [陽気に]話す／[陽気に]感じた(Na[NIL])

(8)分裂文の焦点

- 太郎がなりたいのは、[女性に親切に]だ。(NaP[NIL])  
 太郎がなりたいのは、[女性にやさしく]だ。(AP[NIL])

(9)中止法

- 花子は穏やかで、太郎は親切だ。(Na[te])

花子は穏やかに、太郎は親切なり。(Na[NIL]；文語)

花子は優しく、太郎は厳しい。(A[te])

花子は優しく、太郎は厳しい。(A[NIL]；文章語的)

(10) (1.10(2f)と比較)

太郎は、[女性にやさしく]さえある。(AP[NIL])

?太郎は、[女性に親切に]さえある。(NaP[NIL])

cf.太郎は、[女性に親切で]さえある。(NaP[te])

## 結び

本論文では、第一節で判定詞の分析をし、第二節で形容動詞の複合語としての分析を考察した。これまでなんの断わりもなく、形容動詞をNaと略記してきたが、これは、ナ形容詞の「ナ」でも、nominal adjectiveの頭文字でもなく、実は、non-inflectional adjective(不変化形容詞)の頭文字を取ったものである。すなわち、松下(1930)が言うように、Naはまさに、屈折能力を欠いた(活用不能な)形容詞である。意味的には、状態のありようを表わすという点で、形容詞と同じである。しかし、文中で用いるためには、統語的な機能を表示しなければならず、そのために、意味的に無色透明(ダミー)で、Naの表わす状態性に矛盾しない屈折可能な語の助けを借りる必要があった。この条件を満たしたのが、判定詞であった、と考えられる。この状況とちょうど平行に、いわゆる動名詞(verbal noun)('太郎が言語学を研究)の際に「研究」は、松下が言うように、屈折能力を欠いた(活用不能な)動詞であり、統語的な機能を表示するために、意味的に無色透明(ダミー)で、動名詞の表わす動態性に矛盾しない屈折可能な語、すなわち「する」、の助けを借りる必要があった、と考えられる。だとすれば、形容動詞をNa(non-inflectional adjective)と呼んだのになら、動名詞はNv(non-inflectional verb)(不変化動詞)と呼ぶことができる。NaとNvがともに現代語において造語力を保っている理由の一つに、語形変化をしない点がある、と考えられる。

活用形の不足を補う方法としては、類型論的には、補充(suppletion)、迂言法(periphrasis)、融合(fusion)の3つの手法がよく用いられる。補充は、英語のgo-wentや現代語の「死ぬ-亡くなる」などに見られるように、まったく異なる語の活用形で代用する方法である。迂言法は、英語の未来形や現代語の尊敬語「お~になる」、Nv「研究する」などに見られるような、助動詞、補助動詞などの助けを借りて複数の語で表現する方法である。融合は、本来助動詞だったものが本動詞の一部に取り込まれて不可分の一語となった場合で、古語の形容詞カ活用や形容動詞のナ活用、タ活用、現代語のサ変動詞「愛する、信じる」などに見られる。もし、本論文で論じた不変化形容詞(形容動詞)の複合語分析が正しければ、形容詞丁寧体(「うれしい+です」)と並んで、活用形の不足を補うのに複合を用いた珍

しい例ということになる。

不変化形容詞(形容動詞)と不変化動詞(動名詞)との比較、類型論における位置付けなどについては、次回以降に扱うことにする。

#### 参考文献

Gazdar, G., E. Klein, G. K. Pullum, and I. A. Sag. 1985. *Generalized Phrase Structure Grammar*. Harvard University Press.

橋本進吉 「國語の形容動詞について」『藤岡博士功績記念論文集』(1935) 『日本の言語学』第4巻(1979)に再録

服部四郎 「附屬語と附屬形式」『言語学の方法』(1950) 『日本の言語学』第4巻(1979)に再録

影山太郎 『文法と語形成』(ひつじ書房 1993)

木村新次郎 「名詞と形容詞の境界」『言語』3月号 44-49頁(1998)

益岡隆志・田窪行則 『基礎日本語文法—改訂版—』(くろしお出版 1992)

松下大三郎 『改撰標準日本文法』(中文館書店 1930) [勉誠社複製 1974]

三尾砂 『話言葉の文法』(1942) [くろしお出版復刻 1995]

水谷静夫 「形容動詞辨」『國語と國文學』28巻5号(1951) 『日本の言語学』第4巻(1979)に再録

Nishiyama, K. "A Unified Analysis of Japanese Adjectives." *Japanese/Korean Linguistics* vol.8. pp.175-188.

阪倉篤義 『改稿 日本文法の話し 第2版』(教育出版 1983)

城田俊 『日本語形態論』(ひつじ書房 1998)

鈴木重幸 『日本文法・形態論』(むぎ書房 1972)

寺村秀夫 『日本語のシンタクスと意味 I』(くろしお出版 1982)

寺村秀夫 『日本語のシンタクスと意味 III』(くろしお出版 1991)

時枝誠記 『日本文法 口語篇』(岩波書店 1950)

上野義雄 「日本語形態論試論(その1)」『大妻レビュー』第31号 37-89頁(1998)

上野義雄 「日本語形態論試論(その2)」『大妻女子大学紀要—文系—』第31号 37-64頁(1999)

山田孝雄 『日本口語法講義』(宝文館 1922)

吉澤義則 「所謂形容動詞に就いて」『國語國文』2巻1号(1932) 『日本の言語学』第4巻(1979)に再録  
渡辺実 『国語構文論』(塙書房 1971)